

[第32回学術集会 シンポジウム2]

1型糖尿病と歩んで42年

北海道つぼみの会 事務局長

田島 和仁

私が1型糖尿病を発症したのは6歳の時、当時はやらなくてはいけない事を一生懸命にこなしているだけでした。また、皆さんご存知ないかもしれませんが、インスリンはバイアル、血糖測定も保険適用になっていない時代でした。初めて一人でインスリン注射をするときは、怖くて怖くて、手が震えて太ももに注射をしたのを覚えています。思春期は、人前で注射ができず、1型糖尿というのが恥ずかしい時期もありました。また、私自身が1型糖尿病の操り人形のような気がして、精神的に苦しい時期もありました。しかしながら、大人になってからサマーキャンプ参加という機会をもらい、自分の病気にコントロールされる人生でなく、病気をコントロールし、うまく付き合っていく人生を選択するのが大切

という気づきをえました。おかげで、精神的には楽になり、少しずつ1型糖尿病と向き合えるようになりました。それでも、血糖のコントロールがうまくいかないと、自己管理の難しさを実感し自信を失いかける事もありますが、同じく1型糖尿病を持つ妻と結婚し、そして息子を授かり、幸せな日々を過ごしています。さすがに息子が1型糖尿病を発症したときには、ショックを受けましたが、妻とも話し合い、僕らが幸せなら、1型糖尿病を持っていても、きっと幸せな人生を送ってくれると信じています。本日は、貴重なお時間をいただき、1型糖尿病という病気と向き合ってきた42年間をお話しし、皆様と議論できれば嬉しいです。